



年以上前のことだが、三年間奥出雲町の幼稚園で絵本の読み聞かせをしていた。何となく読んでみたくなって、五分で読み終える落語の読み聞かせ本を試しに読んでみたら、これが意外なことにウケた。絵がないにも関わらず、子どもたちにこれほど落語が受け入れられるとは思っていませんでしたので驚いた。後に高尾小学校で学校を挙げて落語をするようになるが、この時の経験がなければ絶対に思いつかなかっただろう。

四、五歳の子から、十四、五歳までの十歳に及ぶ年齢差の中で読み聞かせを続けているうちに、ぼくの中に一種の経験則が形をなした。落語が理解できるのは小学三年生以上、というのがそれである。一、二年生までは、オチを言ってもポカンとされることが多かった。避けた方がよさそうだというのがならいになった。小学校で落語を始めたときも、数年後には全校に広がっていったが、やはり落語そのものが一、二年生には難しく、ごく簡単な小咄ができれば十分だ、と考えていた。そもそも今はかけている時間がちがうので、ぼくの経験則はすべて、学校の中ではという括弧づきなのだが、その当時は学校以外の教育環境を知らないもので、まったくもって見えていなかった。教育界には発達段階という考え方があって、生まれ

てから成人に至るまでの、人の心身の発達していく過程をふまえて指導すべし、となっている。至極まっとうな考え方であるが、ひとりひとり異なるのををもっとも多そうなどころでくくっているの、個人差などは捨象されるほかない。集団を相手にする学校では、これを無視するわけにはいかない。

塾は学校とは異なり個人相手だということが、頭では分かっている。なかなか腹に落ちていなかった。それが証拠に、落語教室に最初に入ってきたのは一年生たちだったのだが、ぼくがまず思っただけは、まいったなあ、だった。ところが、この子たちは二月もすれば堂々と高座に上がってしゃべるようになり、長い嘘にも抵抗を示さなかった。

今、落語教室生の三分の一は幼稚園か保育園の未就学児である。看板は、とつに「こども落語教室」に掛け替えている。ぼくがかなり強固に抱いていた経験則は度々修正を迫られ、あんまり年齢は意識しない方がいいかな、と思うまでに至った。聞いて、自分にもできそうだと思う時点で、落語に取り組める段階に至っているのだ。

直近で入ってきた三歳児、四歳児の三人を未就学シスターズとこっそり呼んでいるが、この子たちもまた年相応なこと早速に吹き飛ばしてくれている。



百号を突破し、二〇〇四年の夕焼け通信は五〇五号から始まる。さて、この年には何が起きていたのか。

一、新潟中越地方で震度七の地震 二、サマワに自衛隊派遣、一年延長も決定 三、アテネ五輪で金メダル史上最多タイの十六個 四、巨人が日本一、イラクで日本人拘束、香田さん遺体で発見 五、再編問題で球界大揺れ、初の選手スト 六、台風上陸最多の十個 七、三菱東京FGとUFJHDが経営統合で基本合意 八、拉致被害者の蓮池、地村、曾我さんの家族帰国 九、参院選で自民敗北、民主議席増 十、イチロー、大リーグの年間最多安打記録更新

一位は自然災害だ。地震列島の日本、毎年のように大きな地震が起きている。この年は中越で起きた。この地震で、災害による死者よりも災害関連死が上回り、エコノミークラス症候群という言葉がクローズアップされた。ちょうど原稿を書いている日、新聞に南海トラフ地震の発生確率について掲載されていた。今年一月に三十年以内に「八十%程度」としてきたのを修正して「六十〜九十%程度以上」または「二十〜五十%」と併記すること。いずれにせよ、高い数値であることには変わりはない。あまり地震が起これなかつた山陰でさえ、四半世紀前にはマグニチュード七・三の地震に見舞われた。いっどこで起きるか分からない。二位と四位に関して。前年の三月、大量破壊兵器の存在を主張したアメリカ合衆国が主体となつてイラクを侵攻。日本の自衛隊もPKO以外で初めて派遣された。それからサマワにも派遣されることになる。そして、侵攻後の政情不安定なイラクで日本人が人質になり、自衛隊撤退の要求を飲まなかつたことで人質が殺されてしまった。無くならない戦争・紛争、日本もだんだんと過去の反省を忘れつつあるようで恐ろしい。

アテネ五輪の金メダルラッシュには沸いた。柔道では八個、レスリング二個、水泳三個、体操団体、陸上二個、ニュースを見ては歓声を挙げていた。このアテネパラリンピックで金メダル七個、銅メダル一個を獲得した成田真由美さんが先日亡くなった。中学生の時に半身不随となり、その後も幾多の病気で入院を繰り返して、交通事故で頸椎まで損傷してしまう。そんな成田さんを奮い立たせたのは、志半ばで亡くなった友への思いだったという。

30代フリーター 「国家を変えていくこと」ではなく、「国家に何をさせてはいけないか」を考えるようになった、と三上治が書いていた（「世田谷村から」弐号、8月19日）。「国家の暴走をやめさせるのがさしあたりの課題だ」とし、「それは国家に戦争をさせないことだ」と言っている。

年金生活者 求められてもいないことをしては国民を圧迫する習性が国家にはある。その最大のあらわれが戦争だ。国家の主要な機能は富の再分配にある。この場合の富は、所得や税、産業や生活のインフラだけでなく、軍事力や警察力も含まれる。だから、再分配とは単に富を右から左に移転させるだけでなく、国民の行動を代行することとしてとらえる必要がある。「代行」は国家を国民のコントロールから遠ざける作用をし、戦争はその結果がもたらす最悪の事態だ。

そうした習性を免れない国家の最終形態が近代の国民国家で、それは2度にわたって世界大戦を引き起こし、それに懲

りてもなお長期の冷戦を続けた。そして、いままたおびただしい殺戮をウクライナとパレスチナで続けている。

30代 なぜ「国家に何をさせるか」よりも「何をさせないか」なんだ。

年金 これまで人類は国家に様々なことをさせてきた。国家を自らの代行者として扱ってきた。それが国家を「暴走」させた。AIやロボットの「暴走」というSFの世界が現実の歴史ではとつとつに起きていた。ナショナリズムが各国に伝染し、強権支配への傾斜が強まる現在の世界で、「国家に何をさせないか」は最もリアルな課題のひとつになつていっていると言える。

30代 求められてもいないことをしては国民を圧迫する国家の習性の最大のあらわれが戦争だという主張には、たちまち異議が唱えられそうだ。かつて日本国民は真珠湾の奇襲攻撃に熱狂し、対米戦争を積極的に支持したではないか、と。

年金 たしかにその通りだ。だが、それはもともとから国民が望んでいたものではなかった。その前史となつた日中戦

争は、現地での軍部の独断専行で始まり、政府はそれを追認した。国民が求めて始まつた戦争とは言えない。ましてアメリカとの戦争を国民が望んでいるはずもなかった。

しかし、中国の激しい抵抗に遭って泥沼にはまり、米英などから経済包囲網を敷かれて孤立し、日本の外交的・軍事的な選択肢は狭まつた。1941年の米国による石油禁輸は「資源が尽きれば立ちゆかない」という切迫感を国民の間に生み、対米開戦やむなしの世論が広がつた。

そこへ真珠湾攻撃の「大戦果」が伝わつた。選択の余地がないに等しいところまで追い込まれていた国民の切迫感はそのれによつて一気に解放され、それが熱狂となつて噴出した。もうあとには引けないという気分が国中で共有された。

以上のように理解すれば、求められてもいないことをしては国民を圧迫する国家の習性の最大のあらわれが戦争だという判断を修正する必要はない。

度経済成長の推進には、解釈改憲による自衛隊の合法化と日米同盟の堅持で足りたからだ。それ以上踏み込むことは国民の反発を招くリスクがあつた。

30代 それに対し、55年体制を構成したもう一方の極である日本社会党は「護憲」を党是とし、自民党の「改憲」の党是と同様に、それを党の結束を保つ「象徴」としたと言える。

年金 だが、社会党が民主党に吸収されたとき、9条の堅持は基本的な主張として引き継がれたものの、党是からは格下げされた。立憲民主党は民主党よりも9条堅持の主張が強固だが、党是とまでは位置づけられていない。

その理由は社会党の「護憲」が社会主義へ向かうステップとして位置づけられていたことにある。そのぶん「護憲」は手段の性格を帯び、自民党の「改憲」にくらべて重みが不足していたと言える。しかし、民主党、立憲民主党は「護憲」をイデオロギーから解放したとも言え、それは9条それ自体の価値を再発見する契機になり得る。

国家は国民の望まないことをするとき、それを強引に実行し、あとに引けば大きな負担を強いられる状況をつくるのを常套手段とする。

30代 自民党は憲法を書き換えて、国家にさせてはいけないことを解禁しようとしている。

年金 自民党が憲法改正を党是とし、ことあるごとに改憲を主張するのは、本気でそれを実行に移そうとしているからというよりも、この党是を党の結束を維持するための「象徴」として利用しているからだ。2009年に民主党に政権を奪われて下野したとき、憲法改正草案づくりに取り組んだことがそれを裏づけている。

議席が激減し、解体すら懸念された自民党は、改憲草案をつくるプロジェクトを立ち上げ、その遂行を通じて結束をはかった。それは成功し、改憲を最大の課題とする安倍晋三の「一強政権」を誕生させた。

改憲の党是が結束の「象徴」たり得ているのは、それが日本のナショナリ

ニュース日記 986
中村 礼治

国家にさせてはいけないこと